

短歌 弱者の悲哀（歌）：文苑

著者	小柳，又一
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 6
ページ	7 4 - 7 4
発行年	1912-06-20
その他の言語のタイトル	弱者の悲：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/6372

さゝげし花よ其花に

せめて心をなぐさめて

すぎゆく春をしのぶれば

ふくめる露のめぐみにや

一つ開きぬ花つばみ

一つ開きぬ花蕾

短歌

弱者の悲哀

布

水

武夫原の黄なる花咲草く原にすぎし三歳を思ひやる哉
ふと思ふ蚊帳のかほり鼻ついて蒸し暑かりし寮の寢室
「敷島」を吸ふ度毎に輪を吹いて鬚を撫でたる室長の顔
意義ありと口に云ひつゝ夢のまに空しく卒ふる吾れのかよはさ
漢文の講義流るゝ夏の日は莊子を夢む人ぞをかしき
「若手」とぞもてはやされしあの男口髯撫でゝ熊本を去る
吾れの「我」を通さんとすれば親の「我」に脆くも折れし戀のはかなさ
女をば毛虫の如く嘲りて三五郎を説く廿四の男
南洋のはなれ小島に咲くと云ふ名さへに知らぬ花を夢みぬ